よんまちかけ橋新聞

yonmachi kakehashi newspaper

よんまちニューウェーブ特集

よんまち
ニューウェーブ

#6

NEW WAVE

よんまち新聞 vol.6 2019年10月　発行：福山駅東地区４商店街連携協議会（よんまち）　支援：福山商工会議所　企画・編集・デザイン：福山駅東地区４商店街連携協議会

今号でご紹介したお店MAP

よんまち とは？

よんまちは、中心部東地区の、四つの商店街地域が手を結んで「福山らしさ」を発信しようと、2017年の6月に発足した「福山駅東地区４商店街連携協議会」の通称です。「きたはま通り商店街」「船町宝船会商店街」「本通商店街」「本通船町商店街」、この4商店街は、江戸時代に作られた２つの橋、「木綿橋」と「天下橋」という橋を共有しながら、城下町の中心地として栄えてきました。このきずなを大事にして、「地域の懸け橋、未来への懸け橋」を合言葉に各々の個性を発信し、福山駅東地区の活性化に連携して取り組もうとしています。

今回のよんまち新聞にご協力いただいた方々

資料提供・取材協力：
田口義之・秋山由実（備陽史探訪の会）
小川晶子さん・福永千晴さん（PRESENTS DANCE STUDIO）
河口知明さん（コスカレード福山スタジオ）
スミヨシ店長（カード＆トイ スミヨシ）
赤山玄さん・黒田秀徳さん（邂逅レコード・ストア）
桒田 慶子さん・荻原 元樹さん（コミュニティハウスumbrella）
枝廣 憲孝（福山商工会議所）
藤原 庸弘さん（丸新株式会社）
高野 国昭さん・井上 和義さん（高野耕石堂）

編集後記（ヘンシュウコウキ）

よんまち新聞は、よんまちの4つの商店街の「面白いこと・人」を集めたフリーペーパーです。
今回は、よんまちニューウェーブ特集。個性的で、新しい文化を取り上げています。
応援をよろしくお願いいたします。

よんまち編集部
編集/写真撮影　安原幸雄（株式会社 安原楽器）
デザイン/イラスト/ライター　木村桃子

特集　よんまち
ニューウェーブ

NEW WAVE

姉妹で届ける ダンスの楽しさ 1

バレエダンサー
福永千晴さん

ダンサー
小川晶子さん

本通商店街にできたダンススタジオ（PRESENTSDANCE STUDIO）では、4歳～70歳の幅広い年齢層の生徒が集まりそれぞれの目的に合わせたダンスを楽しんでいる。

元々、カバン屋だった建物を改装してできたこのスタジオ。ダンスを教えるのは、外からの講師と、この家で育った二人の姉妹、福永千晴さん（姉）と、小川晶子さん（妹）だ。

「おじいちゃんおばあちゃんが長年大切にしてきた場所に新たな歴史を作っていけることが本当に嬉しい。」

二人の姉妹は、それぞれジャンルの違うダンスを専門としている。姉の千晴さんはバレエ歴30年のベテランのバレエダンサー、妹の晶子さんは、バックダンサーとして様々なアーティストの舞台で経験を重ねたヒップホップ系のダンサーだ。

この異なるジャンルを一緒に習えるスタジオは珍しい。リズミカルなダンスを主としながらも、そこに千晴さんのバレエの基礎で体幹や表現力を鍛えるクラスがあることで、生徒の表現に芯が加わり体全体で表現する動きを学べる。

妹の晶子さんは、現在もバックダンサーとして、舞台に出演したり、各地でダンスを教えている。様々な選択肢がある中、なぜ、わざわざ地元で、ダンススタジオを始めたのかその理由を聞くと、

「私たち実家が大好きで、地元が大好き。福山でやりたいと思っていた。バックダンサーとして踊るのは何万人の前だからやりがいはあるけどみんなが見てるのはバックダンサーではなく主役。

ここには私を見てくれる人や私が学んだことを必要としてくれる人がいる。みんなにダンスの楽しさを感じてほしい。」

子どもからお年寄りのクラスまで、様々なダンスが交わる新しいダンススタジオ。ここでダンスを習った人の中から、誰も見たことない、未来のダンサーが生まれるかもしれない。

PRESENTS DANCE STUDIO
プレゼンツ・ダンス・スタジオ
福山市今町3-20
https://presents-dance.com
MAP 1

啓文社ビル4階に、コスプレの写真撮影スタジオがあるのをご存知だろうか。運営する河口さんは自らも亀仙人のコスプレーヤーでありながら、中国地方を中心に、コスプレのイベントを各地で主催している。きっかけはなんと当時の広島市長、秋葉さんだった。

河口さんは、オリジナルTシャツプリント会社の代表をしている。当時、ネット販売を先駆けて行っていた経験を評価され、市長直属の塾で市民にノウハウを教えていた。そんなある日親しくなった秋葉さんから相談を受ける。

「なにか、広島の新しい文化になるようなおもしろいことをしてほしい。」

そこで河口さんが目をつけたのは、コスプレカルチャー。当初は主催者としてイベントの会場に立っていたが、仲間からコスプレ魂を叩き込まれ、自ら衣装を作った。これが日本最年長の亀仙人コスプレの始まりだ。

ぼくは「モテたい」が原動力 2

コスプレイヤー
亀仙人こと
河口知明さん

コスカレード福山スタジオ
福山市笠岡町1-7
啓文社ビル4F
MAP 2
・http://cosquerade.jp
・http://akibajuku.sakura.ne.jp/ease/index.html

コスプレは、様々な町や建物を舞台に、参加者は好きなアニメのキャラクターに扮し写真を撮る。それがSNSなどを通じて発信され観光にも一役買っている。その魅力を河口さんはこう語る。

「コスプレしてると、気分が弾けてオープンになる。垣根も超えて、いろんな人と話ができる。」

河口さんにとってコスプレは新しい可能性との出会いの場だ。

「僕はいつも、モテたいが原動力。その時代時代でモテるために何したらいいかなと考えていた。学生運動も日本一周も、今のTシャツの会社も。女の子にモテる、人にモテる、時代にモテる。亀仙人のコスプレをしてると、様々な人に声をかけられる。訪れた町の地域資源に巡り会えたりね。」

モテたい、その先にあるのは、文化を継承しながらも、時代のニーズにどう答えるかだ。今は大竹市で、和紙漉きボランティアとして活動しながら竹と和紙を使った作品作りをしている。資金は、自らが立ち上げたTシャツ会社から。

「稼いだお金で若者を作っていきたい。誰もやらないことをする文化の後継者。それを教えるのもこれからの役目だと思います。」

何ともカッコよすぎる亀仙人だった。

3 ゲームでひろがるコミュニケーション

すみよし店長

カード&トイ スミヨシさんにはいつもたくさんの人が集まる。彼らが楽しむのは、カードゲームやボードゲーム。学生さんや社会人が集まり、対面しながら、いろんな絵や文字が入ったカードをお互いに繰り出し勝負する。楽しそうだが、頭を使うのか、将棋のような雰囲気も少し感じる。

どんなゲームなのか、やってる若者に話しかけると快く教えてくれた。素人には難しかったが、感想として、子どもの頃、駄菓子屋でキャラクターのカードを集め、好きなキャラクターが出たら嬉しくなり、集めたカードを友だちと見せあったりした。それにトランプゲームが合わさったような感じ。店長のすみよしさんはこう語る。

「この仕事は、若い世代の人とよく話すので、自分が年取った感じがしない。それがいいところですね。」

さらに店長の弟さんもこう語る。

「一人で画面に向かうゲームじゃなくて、電気を使わない、みんなで机を囲んで交流できるものを扱っています。ゲームを通して人の交流を大切に。ひと昔前のアナログな時代の遊びにも近いような気がします。」

確かに、昔のめんこなどと、ルーツが似ているように思う。

店内には、ここに通う人が作ったプラモデルも飾ってある。置いて帰ることによって、たくさんの人が楽しんで見てくれるからだ。

趣味とゆうのは、出会いがなければ、自己満足で終わることも多いが、同じ趣味の人と出会ったときは嬉しく、それを通した人との交流で学ぶこともある。この場所があることによって、趣味を通して心おきなく集まり、交流を楽しめる。ゲーム屋というより、一つのコミュニティの場だと感じた。

カード&トイ スミヨシ MAP 3
福山市笠岡町4-1
Tel/Fax 084-921-1667

4 五感で聴く アナログレコードの世界

デジタルの音ではなかなか表現できない、アナログの臨場感と温かみのある音。今、レコードが再注目され、レコード世代の人も、デジタル世代の若者にもファンが増加している。11月上旬に本通商店街にオープン予定のレコード店「邂逅レコード・ストア」の黒田秀徳さんと赤山玄さんに、レコードの魅力や、どんなお店になりそうかお話を聞いた。

「ここでなにかできたらいいなと、なんとなく思っていました。」

「福山は、レコード屋を求めてる人が多いと思います。」

笠岡出身の黒田さんは、若い頃から音の世界に魅了され、岡山のレコード店、GREEN HOUSEに30年勤めた、まさにレコードを知り尽くした男。赤山さんは福山で育ち、会社員をしながらレコードを集めたり音楽のイベントなどをしていた。共にDJでもあり黒田さんはバンド活動もしている。

二人は音楽の場で知り合い、交流を続けていたが、赤山さんの親戚の店舗が空き店舗となったのを期に、かねてより考えていたレコード屋をこの場所で二人でやろうとなった。小学生から商店街が遊び場だったという赤山さんは、同級生も商店街にたくさんいる。本通は文化が集まる町という印象を以前からもっていたそうだ。

「町は人が作っていく。音楽のコミュニティに集まる人から出会いがあり、それが町に広がっていけば面白いなと思ってます。」

お二人から聞く、レコードの話は感覚的で、なるほどなと思うことが多い。まずは音の違い。振動や作業音など、デジタルでは、雑音とみなされカットされる音がレコードには入っている。その深みに懐かしさを感じる人もいれば、デジタル世代の若者には、逆に新鮮な音として受け入れられる。さらに、音を形あるものとして持つことの魅力。盤を選び、針を落とし、ジャケットデザインも併せながら楽しむ世界観。『邂逅レコード・ストア』では、様々なジャンルのレコードを扱い、ゆったりした空間でコーヒーを飲みながら、盤を選ぶ、まさに五感で楽しむレコード屋さんになりそうだ。

赤山玄さん

黒田秀徳さん

邂逅(かいこう)レコード・ストア MAP 4
福山市笠岡町4-25
kaikohrecordstore@gmail.com
11月上旬にオープンします!!

まちゼミ座談会

小さなお店だからできること

福山商工会議所 産業振興課
枝廣 憲孝さん

コミュニティハウスumbrella
荻原 元樹さん

コミュニティハウスumbrella
桒田 慶子さん

高野耕石堂
井上 和義さん

聞き手
木村 桃子

まちゼミ

商店主が講師となって、専門知識やプロならではのコツを無料で提供する少人数制のゼミ。2003年に岡崎市で始まって、全国に広がったまちゼミ。福山でも商工会議所が主催で、よんまちのお店が多数参加しています。今回は9月25日に岡崎市で行なわれた第5回全国まちゼミサミットに参加した3人に加え福山まちゼミ参加店の方からお話をお聞きしました。

何のための「まちゼミ」か

井上　今回、全国から400地域ほどの参加があって、みんな似たような状況を抱えていました。ネットでモノを買う時代、自分たちの強みは何か、自分のお店の価値と現状を知ることが大事だと改めて感じました。

　他の地域の取り組みで印象的だったのは、まちゼミで出会ったお店同士がコラボ商品を作ったりしていて、そういうのも面白いと思いました。

木村　自分たちのお店の価値を知るのって、一番難しそうに思います。

井上　そうですね。まちゼミってそのためにあると思います。お客さんに自分たちのお店を知ってもらうだけじゃなくて、その逆に、僕たちがお客さんのことを知れる機会なんです。僕のお店ははんこ屋で、体験講座や職人の技を見てもらったりしてますが、毎回、参加者の反応から新鮮な学びがあります。え？この部分に興味を持つんだ、とか。

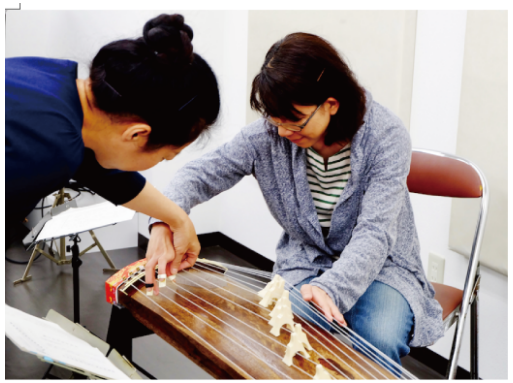
桒田　私は今回の全国サミットで、少し反省しました。まちゼミをあまり知らずに、講座の参加人数を集めることばかり考えていました。

外からの目線で魅力を知る

木村　講座内容を見ていると、お店の歴史を聞こうとか、そうゆうものもありますね。お客さんにすごいものを得て帰ってもらうんだというよりも、お互いを知ろうとする、ちょっとした講座という感じがします。

井上　参加者との雑談や質問に答える交流が大切。僕のお店は、作る講座が終わった後、聞く講座をしています。

桒田　うちは美味しいカフェオレを入れて一緒に飲みます。話をしていると、途中でお悩み相談になったり、みんな、話をしたい人、そんな場所を求める人が多いんだと思いました。



安原楽器さんの、過去のまちゼミの様子。まちゼミは、お店の特徴を知ってもらい、お客様と信頼関係を築くことを目的としています。

荻原　まちゼミが終わった後も気軽に来てくれるように、まちゼミに参加してくれた人に、クーポンを配る地域もあって、それいいなと思いました。

参加店同士の交流を

枝廣　まちゼミが終わった後の、アフターフォローも大事だなと思いました。他の地域では、BBQや朝活など、まちゼミをするまでの過程で、参加店同士の連携を深めたりしているそうで、そういうのも参考にできたらと思います。楽しくしている姿を見て、うちもやってみようかな、というお店も増えるかもしれない。あと、サポート役を設けている地域もありました。

まちの人が主体に

桒田　こんな座談会もいいですよね。終わった後で、自分のお店の課題を見つけられるから。あと、まちゼミを紹介するまちゼミの講座があっても面白いですよね。

　このまちゼミのゴールって何かなと考えたとき、本来はまちの人が自ら、こういう、まちゼミのようなことを運営していくのが理想なのかなと感じます。それこそ商店街だけでなく、垣根も超えて福山全体のお店で広がって行ったら面白いですよね。

＼商店街のちいさな幸せみーつけた！／

よんまち百景

10 きたはま通り ヒマラヤ桜の昼と夜

MAP 5

丸新株式会社
藤原 庸弘さん

きたはま通りの街路樹の桜に今、LEDを使って、町に新しい夜景を作ろうとする試みがあります。

　この通りでLEDを取り扱う藤原さん（丸新㈱）は、LEDのスペシャリスト。「夜、通りが暗くて寂しいから、イルミネーションで明るい印象になれば、と思って、一本だけ試験でしてます。」

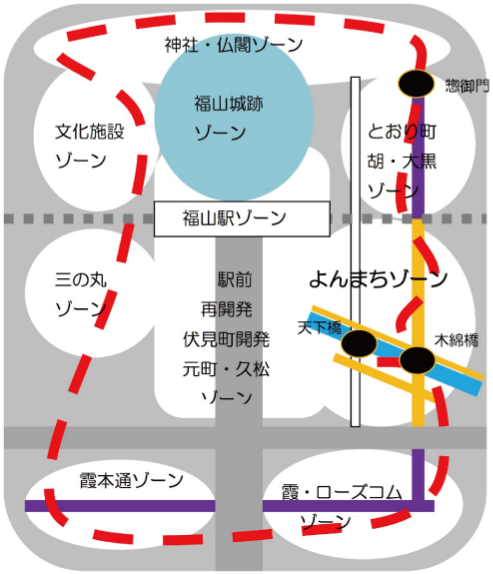
　LEDは熱を抑えるので木に負担もかからず、安全に、通りを華やかに演出できる。ヒマラヤ桜の見頃である十二月～二月には、満開の桜とイルミネーションのコラボが見られるかもしれない。

　この取材中に、桜の下でスケッチをしている女性を発見！スケッチ教室の作品展に出すための絵だそうだ。

　きたはま通りのヒマラヤ桜は、昼も夜も通る人を温かく見守っている。

よんまちおじさんの ふくやま里街ぐるっと巡ろう環状線シリーズ

福山市中心市街地・里街環状線構想案（提案課題）



福山の中心部は、その昔、城下町でした。特にこのシリーズはお城を中心とした東西南北の町人町の昔と今をゆっくり巡る旅です。「いわれ」や人々、今昔のお店や施設などから神社、仏閣、遺跡等、時代にとらわれず「アッ！そうなんだ！」と思いながら読んでいただけるとうれしい。

今後、よんまちを基点に「ぐるっと巡るイベント」の色々なアイデアを提案したいので、ご支援ください。例えば、若者が歴史にふれたり、お年寄りや車いすの方、チャリンコグループ、認知症の方など、みんなが楽しめるイベントを考えています。フォトや絵、吟遊詩人の大会とか。より多くの人々が新鮮な目で、興味あるお宝、街の珍百景等街を発掘してゆけば、人をテーマとした、おもしろくて味わいのある街の発信ができそう。奥深い「里街」を目指して。

環状線小話　その一

小話のはじまりは「よんまち」の結びつきのはじまりの、天下橋、木綿橋のいわれから。

天下橋のいわれ

この橋はお城と並行してつくられた城下町のシンボルです。お堀につながる大きな運河は、幅八十ｍの幅で、今の北浜通りの北側歩道からアーケード街のジョイふなまちの南側（ふな家のある線まで）で橋の中央部分は、ちょうど、船町郵便局のラインでした。そこで天下橋は北の城下入口の惣御門から入江の南まで通じる、いわば、城下の南北線という主軸でした。（現在の麻生時計店の筋）

※上の地図で白い南北線表示

天下橋の名前の由来は、福山城築城の折、江戸幕府は相当の援助をするなか、京都の伏見城を廃城とした折、福山城に多くのものを移築し、その中に擬宝珠（ギボシ）という飾りがあり、四つの内、一セットが、この城下の橋の欄干柱に取り付けられたということです。太閤さんのつくったものを将軍様からいただいた、ということで人々はこの橋を「天下橋」と呼ぶようになったということです。

（次ページへ続く）

よんまち人に会いに行く

きたはま通り
高野耕石堂
高野 国昭 さん
福山市元町15-12　MAP 6
TEL：084-922-3161

高野さんの仕事場は、印のワンダーランド。何か質問するたびにに、いろんなところから、いろんなものが出て来て面白い。

きたはま通りにある、高野耕石堂さん。福山と共に長い歴史を歩んできた、創業１４０年近くにもなる、老舗の印鑑屋さんだ。その歴史を今に継いできた高野国昭さんを訪れた。

高野家の歴史は古く、福山藩主の阿倍家の家臣を勤めていたが、廃藩置県によって武士も生業を持つようになり、印鑑業を始める。高野国昭さんはその１２代目。

仕事場にお邪魔させていただくとまさにクリエイターのアトリエだ。キッチンの中にも作業場があり、別の部屋に入ると、下書きの書が床を埋め尽くす。棚には篆刻の字の辞典がびっしりと。夢中で試行錯誤している空気が伝わってくる。

一つの印を作るのに、こんなにもたくさんの古い資料から、文字の形や意味を調べながら一文字づつピックアップし、小さな四角の中に、形をとりながらデザインしていき、彫っていく。繊細な作業だ。

昔の印譜帳には、レトロな印がたくさん。タイムトリップして、昔の福山の町を歩いている感覚になる。小さな印の中に、高野耕石堂さんが愛してきた福山と、たくさんの人たちへの思いが込められている。

印を押すという習慣は、私たちの人生に欠かせないもの。ぐっと力を入れて押す瞬間に込められるのは、責任だったり、覚悟だったり、特別な自分の感情がついてくる。印が、たくさんの約束事や、大切な場面で存在するのは、そんな人の感情をのせてきたからかもしれない。高野さんの作る印は、１８８０年の創業から今に至るまで、昔から変わらず、地元のそんな人の感情を支えてきた、まさにお守りのような印鑑なのだと感じた。これからも、人々に愛される印を作り続けてほしい。

できた印は、印譜帳に一つづつ丁寧に押され、保管されている。今で言うお店のロゴマークがたくさんあり、印から福山の歴史をたどって見ることができる。現在、代表を継いでいるのは甥の井上和義さん。叔父である高野さんの仕事風景を幼い時から見てきた井上さんにとって、高野さんは自分を育ててくれた親のような存在でもあり、尊敬する師匠であると、語ってくれた。

懐かしのシリーズ
江戸時代後期の福山中心地古地図

地図：高野耕石堂 所蔵

環状線小話について
参考：阿部時代・幕末1855年頃の城下町の町名（藩庁地図）
現在ある町名：胡町・大黒町・今町・笠岡町（とおり町）船町・本町・吉津町・道三町・長者町
消えた町名：桶屋町・上魚屋町・下魚屋町・鍛冶屋町・米屋町・府中町・深津町・蘭町・中町・大工町・
奈良屋町・医者町・新町・神島町上市・中市・下市・福徳町・三吉村・野上村・古吉津町・深津沼田村
※　城周辺、霞町、東町等の武家屋敷は西町、東町という大字表示になっているようです。
※　水野時代と異なった部分があります。　※参考人口：武士約12,000人　町人約12,500人の構成であった

木綿橋のはじまり

城下町建設当初、天下橋筋が城下の主軸道路でしたが、二代勝俊の時代、城下の大改造がある中、城下の北入口である惣御門が東へ約百m移設され（現在地）商人町として賑わっていた、胡、大黒、今町、笠岡町の「とおり町」と入り江南の神島町地区を結ぶ新橋という橋がはじまりです。そして、入り江の両岸が船町といわれ、北浜、南浜と呼ばれました。

木綿橋の名前は？

その新橋が木綿橋といわれる由来ですが、備後北部は、当時、綿栽培が盛んで、備後絣は、久留米絣、伊予絣とともに全国的に有名な産業で、今のジーンズ生産につながっていますが、その綿織物の検査所が橋の南の蘭町（現在の昭和町、南本通）に検尺所があり、検査してもらうために、生産者の農民たちが列をなして二百mもならんで順番を待っていました。そして、次第に新橋の欄干へ品物を懸けているうち、市が開かれるようになり、人々はこの橋を木綿橋というようになったとのことです。

その後、この橋が城下の中心となり、交易、船による往来、藩の役人、番所等の施設も設けられ、江戸の日本橋と同じく、福山の基点（府中、尾道、笠岡まで何里の道標）となりました。

後々こんな唄も。「行こか、戻ろか、戻ろか行こか、ここが思案の木綿橋」と。

次号へ続く